様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３０５３

研究課題名（和文）日本人の教会から日本の教会へ：東北被災地のフィリピン人カトリックの活動を端緒に

研究課題名（英文）From Japanese Church to Church in Japan: Filipino Catholic Communities in Tohoku Disaster Area and Beyond

研究代表者
寺田　勇文（Terada, Takefumi）

上智大学・総合グローバル学部・教授

研究者番号：２０１５０５５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　東北被災地では2011年以後、複数の教会でフィリピン出身者の共同体が形成され、継続的に活動してきた。教会によってはフィリピン出身者が教会活動に欠かせない存在として認識され、それ以外の教会でもタガログ語、英語ミサを中心にフィリピン出身者が教会活動に参加していることが理解された。外国籍信徒が教会活動に積極的に参加する傾向は東京教区以外にも、全国で観察される。2017年11月には各地の共同体の現状を検討するため、関係者を招いてワークショップを開催した。近い将来、ミサ出席者は日本人より外国籍信徒のほうが多くなることは明らかで、「日本人の教会」から「日本にある教会」への変化は不可避的である。

研究成果の概要（英文）：　Since the March 11 earthquake of 2011, Filipino Catholic Communities have been actively participating in the general church activities in Tohoku. In these churches Filipinos were accepted as integral part of the church. Many other churches in Japan have Filipinos joining in church activities through holding of Tagalog or English Mass. The same situations have been observed at churches within the Tokyo Archdiocese and also at many other churches all over Japan. A workshop was held in November 2017 to discuss various issues facing these foreign communities. In the near future, the number of foreign Catholics attending the Mass will exceed that of Japanese. A shift from “Japanese Church” to “Church in Japan” will be inevitable.

研究分野：文化人類学

キーワード：キリスト教　移民　カトリック教会　東日本大震災

１．研究開始当初の背景

日本におけるローマカトリック教会は全国に 16 の教区を持ち､信者総数は 44 万 1107 人（2015 年末）である。この数字は原則として日本人信者が中心で、外国籍信者のほとんどは含まれていない。

カトリック教会は明治期以来、各地で宣教活動を展開し、学校教育、女子教育、医療および福祉分野でめざましい成功をおさめてきたが、日本人信者を獲得するという点では困難な課題を抱えており、上述のように信者数はきわめて少数にとどまっている。

今日、日本人信者の多くが高齢で、ミサへの出席、教会活動への参加が徐々に限られてきている。少子化の影響もあり、若い世代の信者も少ない。大都市の教会はともかく、地方の小規模の教会では、何十年もの間、幼児洗礼、堅信礼が行われていない場合も少なくない。

こうした状況にあって、1980 年代以後、ブラジル人、ペルー人、フィリピン人など海外から移住労働者が来日するにつれ、彼らのなかからカトリック教会のミサに出席する人々が増えてきた。当時、日本のカトリック教会は、こうした移住労働者は数年間、日本で働いた後、それぞれの母国に帰国するので、滞在中、英語、ポルトガル語、スペイン語などの外国語によるミサを提供すればよいと考えていた。しかし、移住労働者のなかには日本で結婚する者も多く、また、繰り返し来日して働く者も多数存在した。

2015 年に在日フィリピン人は 22 万人をこえていた。長期に滞在するフィリピン人の多くは女性で、日本人と結婚し、日本で家族を持つ人々が多かった。フィリピン国民の 83%はローマカトリック教会信者である。来日したこれらのフィリピン人のどのくらいが、それぞれの在住地でミサに出席しているかに関する統計は存在しない。大都会の場合は、英語やタガログ語（フィリピン語）のミサが複数の教会で行われているが、地方では英語のミサすら存在しないこともある。

それでも札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、福岡、那覇などでは、毎週ではないとしても少なくとも月に 1 度は英語またはタガログ語でミサを行う教会があり、フィリピン人信者が出席している。

正確な統計はないが、たとえばカトリックさいたま教区（埼玉、栃木、茨城、群馬の 4 県）には 53 の教会があり、日曜日のミサの出席者は日本人 25%、フィリピン人 50%、その他がブラジル人などと推定されている。

日本人信者と外国人（外国籍）信者の比率は、教区（地域）によって異なるが、一般的に大都市のほうが地方より、より外国籍信者が多いと考えられる。ただし、東京教区（東京都と千葉県）のように、英語またはタガログ語ミサは毎週、複数の教会で行われているところでは、フィリピン人のミサ出席者は多いものの、日本人のカトリック共同体とは異なる時間に集まり、ミサに出席しているため、同じ教会に通いながらも日本人と外国人（フィリピン人、ブラジル人など）が同一の教会共同体を形成しているケースはきわめて少ない。

2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が起こり、地震、津波、原発事故により大きな被害が生じた。被災地となった東北 4 県には、アジアからの移住者、留学生、研修生などが多数いた。なかでもフィリピン人の多くは女性で、日本人の夫、子どもと家庭を築いており、被災後に帰国する等の選択肢はなかった。

被災 4 県を管轄するカトリック仙台教区は、震災直後より外国人を含む被災者の支援に乗り出し、日本全国から司祭が派遣された。岩手県大船渡市のカトリック大船渡教会の場合、応援にかけつけた司祭が大船渡市と陸前高田市に設置されていた一時避難所を訪問し、教会として支援の準備があることを伝えた。その結果、2011 年 5 月になると同地域で生活するフィリピン人女性 60 人程がミサに姿を見せるようになった。同教会の信者は震災以前は 110 人だったが、これらにフィリピン女性と子どもたちが加わり 190 人に達した。

大船渡教会は被災地であるという条件を含めてやや特別なケースであるが、ある意味では今後の日本の教会が進むべき方向を示しているとも考えられる。日本人を中心に運営してきた教会から、外国籍の信者を迎え入れて新たな運営の形態を模索する日本の教会への転換という図式である。

本研究は、こうした問題意識をもとに進められた。

２．研究の目的

2011 年 3 月の東日本大震災以後、東北被災地のカトリック教会およびフィリピン出身信者の間で、在地の教会で行われるミサに出席し、その他の教会活動にも参加しようとする機運が高まってきた。

震災以前には仙台市内を除いては英語のミサが定期的に行われることはほとんどなく、フィリピン出身信者のうちの少数が日本語ミサに出席する以外、多くの信者は教会には姿を見せることはなかった。これらのフィリピン出身信者のほとんどは女性で、日常の日本語会話には堪能であるが、ミサで用いられる日本語や聖歌を理解することは難しかった。また、日曜日は家族の世話、子ども達の部活のつきそいなどがあり、さらに商店などに勤務している場合は日曜に休みをとることができず、時間的にもミサに出席することは困難だった。その一方、多くの教会では外国籍の信者が姿を見せても、どう対処したらよいのか十分な準備ができていなかった。

しかし、東日本大震災直後から、カトリック仙台教区は全国の教会、教区と相談の上で、

被災地の教会にできるだけ司祭を常駐させ、外国人、日本人を問わず、さらには信者であるか否かを問わず、支援の手をさしのべることを決定した。その結果、被災地のなかでもいくつかの教会で、フィリピン出身の信者が多数集まるようになり、それぞれの教会の司祭、日本人信者、教区の理解を得て、フィリピン出身者の共同体が組織されるようになった。その詳細については、次の 4.で述べるが、こうした活動の結果、場合によっては、日本人に加えて外国籍信者、とくにフィリピン人、フィリピン出身者を含む教会の新しい運営モデルが提示されつつある。

これまでのどちらかといえば欧米をモデルとしてきた日本のカトリック教会が、フィリピン人、ブラジル人などと共に、「日本人の教会 （Japanese Church）」から「日本にある教会 (Church in Japan)」への方向転換を余儀なくされていると考えられる。

本研究では、東北被災地におけるこうした新しい動向に着目しつつ、被災地以外のカトリックに見られる教会運営の新たな傾向と比較し、フィリピン人、フィリピン出身者等をはじめとする外国籍信者の参加による日本のカトリック教会の変容の実相を明らかにするとともに、日本における多文化社会構築のありかたを宗教の立場から検討することを目的とする。

３．研究の方法

主たる研究方法は、それぞれの教会における参与観察、関係者のインタビュー、カトリック教会関係の新聞、雑誌、教会独自のホームページなどの資料を利用することである。

具体的には、まず初年度の平成 27 年度には、それ以前より参与観察を続けてきたカトリック仙台教区の大船渡教会（岩手県大船渡市、陸前高田市等を司牧範囲とする）の活動を観察すると同時に、被災地以外の教会としてカトリック新潟教区新庄教会（山形県新庄市）、さらに遠距離にあるため参与観察の機会は限られるが、カトリック高松教区の中村教会（高知県）、東京教区のいくつかの教会を検討の対象とした。

フィリピン人、フィリピン出身者の参加により教会運営の方法、モデルが変化しつつある状況を、参与観察と公式・非公式のインタビュー等により検討した。

教会運営のあり方を検討する際の指標は、教会員数、国籍別信者数、ミサ出席者数、ミサの言語、洗礼者数、堅信礼を受けた者の人数、教会委員会委員の構成、教会報や各種掲示に用いられる言語、国際結婚の子どもたちのための信仰養成プログラムの有無、外国籍信者の出身国で行われている各種のカトリック信心業の導入と実践状況などである。

第 2 年度（平成 28 年度）、第 3 年度（平成 29 年度）もひきつづき、上述の各教会を中心に参与観察、インタビューなどを実施した。それ以外に、東京でカトリック中央協議会、日本カトリック司教協議会、難民移住移動者委員会関連の資料を収集し、東京教区カトリック東京国際センターでは資料等を閲覧した。さらに東京教区で 2000 年代初めに組織され活動を展開している GFGC (Gathering of Filipino Groups and Communities)の主要な活動（総会、チャリティーコンサート、フィリピン人の聖人の祝祭日祝うミサ、クリスマスと新年の集会など）を観察する機会を得た。

また、最終年度（平成 29 年度）の 11 月 11 日は上智大学で、下記のワークショップ（使用言語は英語、科研費による）を開催した。テーマは、“A Welcoming Church: The Experience of Ofunato Catholic Church after 3.11”であり、本研究が標榜する「日本人の教会」から「日本の教会」へという変化が、被災地の教会においてどのように進んでいるかを関係者とともに議論する機会となった。

ワークショップでは、寺田による報告につづき、大船渡教会の菅原圭一氏、同 Erva Sugawara 氏（同教会のフィリピン出身者の共同体リーダーの 1 人）、Edgar Gacutan 神父（2017 年 4 月まで 3 年数ヶ月間、同教会主任司祭）が、それぞれの立場から東北大震災後の状況、教会の活動等について報告した。ワークショップ後半では、Maria C. Kasuya 氏（東京大学助教、上述の東京教区 GFGC 代表）によるコメントにつづいて 40 名をこえる出席者との間で活発な議論が展開された（ワークショップの記録は、日本語に翻訳した上で、平成 30 年度中に、上智大学アジア文化研究所から刊行される予定である）。

４．研究成果

本研究により、以下の点が確認された。

① 地域により差異はあるが、日本のローマカトリック教会では、日本人信者数の増加はほとんど見られず、また信者の高齢化が進行しているため、日本人信者総数は今後、徐々に減少していくことが推測される。

その一方、海外から来日し、日本に在住している外国籍信者は依然として増加傾向にあり、かれらが国内各地のカトリック教会で行われている各種のミサに出席していることから、今後、これまで通り、日本人を中心として教会活動を維持できるかどうか難しい問題に直面している。

現状では日本のカトリック教会は外国人信者との関連で、いくつのグループに分けることができる。

(1) 外国籍信者が皆無、またはほとんどいない教会。これは都市部よりも地方の農村部等の小さな教会に多い。そうした教会では、これまで通り日曜日に日本語のミサが行わ

れているが、司祭の不足により、毎週ミサをささげることができず、月に１度程度になる場合が少なくない。

⑵ 外国籍信者がいるが、その数が日本人信者数に比べて極端に少ない教会。こうした教会では、外国籍信者は日本語のミサに出席し、教会のメンバーとして受け入れられている。ただし、外国籍信者らが自分たち独自の信心業を実践することはほとんどない。

⑶ ある程度の信者数を有する日本人中心の教会だが、外国籍信者も相当数おり、かれらの多くは日本語ではなく、英語、タガログ語、ポルトガル語、スペイン語などのミサに出席している教会。こうした場合、たとえばフィリピン出身信者の多くは、日曜午前中の日本語ミサではなく、月に１度ほど同じ教会で午後に行われる外国語のミサに出席することになる。また、母国のカトリック教会で一般的な信心業（聖母崇敬、ロサリオなど）を独自に実践している場合もある。

こうしたケースでは、１つの教会に２つの共同体が存在することになり、多くの場合、相互の関係、交流は想像以上に限られている。教会委員会で任命された国際交流担当委員が、教会と外国籍信者の間をとりもつことも多い。年に１度行われる教会のバザーで、外国籍信者が母国の料理を準備し、民族舞踊等を披露することもある。

⑷ 大都市ではなく、とくに地方に見られる教会で、ミサ出席者からみた場合、日本人信者数と外国籍信者数が拮抗、または外国人信者のほうが多い教会。たとえば高松教区の中村教会などがその例であり、日曜日のミサ（日本語で行われるが、聖歌の一部は英語またはタガログ語で歌われる）には日本人信者数名、フィリピン出身者 10 数名が出席している。この教会の場合、これまで担当司祭は修道会所属の外国人であり、教会委員会代表はフィリピン人女性が務めている。

⑸ 大都市あるいはその周辺部の教会で、日本人信者も多いが、外国籍信者も 50～100 人と比較的多数の教会。日曜日午前中には日本語ミサが行われるが、月に何度かは英語（フィリピン人、アフリカ出身者などが出席）、タガログ語のミサも行われている。日本人と外国籍信者は基本的に良好な関係にあり、教会内の掲示板などでは情報共有は日本語と英語で表記されなど工夫がなされている。フィリピン出身者は、フィリピンで行われている信心業や聖人崇敬を実践しており、日本の教会という枠組みのなかにあっても、自らの文化的なアイデンティティーを表現する場が確保されている。これらは日本人、外国籍信者がそれぞれ長年の経験の蓄積のなかで築いてきたものであり、「日本人の教会」から「日本にある教会」への変化という点では、最も現実的な形態を築いてきていると言えよう。

② 各教会の事情は、教区の考え方、教会委員会は教会役員の考え方、さらに司牧の現場に配置されている司祭の考え方により、かない大きな違いが見られる。

日本のカトリック教会が、司牧の対象として日本人だけでなく、外国籍信者を含める必要があることは、教会指導者（教区長など）の間では共通認識とされているが、各教会単位でみた場合、そうした認識がどこででも共有されているとはいいがたい。ふだん外国籍信者と一緒に活動している教会の場合、外国籍信者の存在が可視化されており、教会委員会に外国籍信者代表が任命されていることが多い。それに対しふだん外国籍信者が教会のなかでほとんど見られない場合は、仮に外国籍信者がクリスマスや復活祭などに教会に姿を見せても、どう対応したらよいか戸惑うことが少なくない。

③ 外国籍信者の側にもさまざまな差異、違いが存在する。

東京教区の場合、韓国人、韓国出身者は、1985 年以来、東京カテドラルの施設を利用して、カトリック東京韓人教会（東京韓人天主教会）を構成している。

ブラジル人信者の場合、彼ら独自の教会施設は持たないが、日本各地にブラジル人が集まり、ブラジル人司祭、ブラジル人シスターの助けをかりて、ポルトガル語ミサを継続的に行っている。

ペルー人信者の場合は、スペイン語ミサ、それが不可能な場合にはポルトガル語ミサに出席する傾向にある。

中国人信者は、東京教区では中国語ミサを毎週行っている教会に集まる。

フィリピン人信者の場合は、上に見てきたように、全国の教区、教会で行われている英語ミサ（あるいはタガログ語ミサ）に出席する傾向がある。こうした英語ミサの場合、出席者の多くはフィリピン人であり、たとえば東京教区の麹町聖イグナチオ教会の日曜日の英語ミサには毎週 1000 人をこえる信者が集まり、その多くがフィリピン人である。
英語ミサがない場合でも、日本語と英語の二言語併用ミサが行われている教会もある。また、日本語のミサであっても、フィリピン人信者が出席している場合、日本語で主の祈りを唱えた後で、フィリピン語で同じ主の祈りを唱える教会もある（前述の大船渡教会など）。

また、フィリピン人信者が彼ら独自の信心業を実践している教会では、聖母崇敬を目的とするロサリオの祈り、信者宅持ち回りで行うブロック・ロサリオ、カトリック教会暦１月の幼きイエズスのノベナ（祈り）とミサ、教会行列などが行われる場合がある。さらに５月の聖母マリア祭、サンタクルーサン（聖

十字架祭)、フィリピンの聖人である聖ロレンソ・ルイスの祝日のミサなどがそれにあたる。これらの信心業、活動には通常、日本人信者はほとんど参加せず、フィリピン人中心に行われている。

④ 最後に、日本のカトリック教会における、きわめて最近の傾向として、上記以外にベトナム人信者の動向ついても注意を払う必要がある。
　長期滞在の外国人のうち、ベトナム人は 19 万 9990 人（2015 年末現在、国別第４位）に達している。その多くは日本語学習のために来日した者、技能研修生として来日した若者たちである。ベトナム国民のうちローマカトリック教会信者は 10 数%であるため、日本で暮らすベトナム人カトリック信者数は多くはないが、それでも東京教区、さいたま教区では、ミサに出席するベトバム人が激増しており、いくつかの大きな教会ではベトナム語のミサが開始されるようになり、数 100 人もの出席者を集めている。
　こうした現象も、また「日本人の教会」から「日本にある教会」への転換を促す要因になるものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 寺田勇文「岩手・大船渡　これからの日本の教会」『カトリック新聞』2016 年 6 月 5 日号、1 頁（査読なし）。

〔学会発表〕（計 5 件）

① TERADA, Takefumi, “From the ‘Japanese Church’ to the ‘Church in Japan’: Changing Faces of the Roman Catholic Church in Japan”, International Conference on Asian Christianity (organized by the International Journal of Asian Christianity, IJC), 2018, Chennai, India.

② TERADA, Takefumi, “Filipino Popular Devotion Introduced into the Roman Catholic Church in Japan”, Japan and East Asia in the Midst of Change: Carving A Path for the Region, 2017, Manila, Philippines.

③ TERADA, Takefumi, “From Japanese Church to Church in Japan: Development of Filipino Roman Catholic Communities in Japan”, The 5th International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia, 2016, Cebu, Philippines.

④TERADA, Takefumi, “Filipino Mothers and the Changing Faces of the Roman Catholic Church in Japan”, American Academy of Religion, 2016, San Antonio, Texas, USA.

⑤ TERADA, Takefumi, “Filipinos in Northern Japan after the March 11 Earthquake”, The Third World Studies Center, University of the Philippines Diliman, 2015, Quezon City, Philippines.

〔図書〕（計 1 件）

① TERADA, Takefumi (ed.), “The Faces of Being Church among Migrant Filipinos in Japan”, Institute of Asian Cultures, Sophia University, 2016 (2nd version), 51p.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

⑴研究代表者

寺田 勇文（TERADA, Takefumi）
上智大学・総合グローバル学部・教授
研究者番号：20150550

⑵研究分担者
（　　）

研究者番号：

⑶連携研究者
（　　）

研究者番号：

⑷研究協力者
（　　）